

閉校になった大学跡地を有効利用できないものかという声に賛同した市民たちの手で作り上げられたのが、「森のゆめ市民大学」。その拠点地になっているのが、「新川学びの森 天神山交流館」です。この施設は、国際交流活動、生涯学習教室や趣味講座、また、音楽活動の練習など、個人やグループでの幅広い活動に利用されています。また、ミニコンサートも開ける桜ホール(合唱室)、ブラスバンドの練習に適した合奏室、ピアノの個人練習室など、音楽のための各種練習室があるのも特徴で、生涯学習や各種セミナーだけでなく、宿泊研修や音楽合宿など、特色ある学びの場として親しまれています。

新川学びの森 天神山交流館



特別インタビュー

「森のゆめ市民大学」

学長 筑紫 哲也さん

「学ぶ」ってのは、競争じゃないんです。楽しいと思えることが、大事じゃないかな。

「一番のカギは、自発性。それがないと、成り立たない。」

学長を引き受けた動機は、いたってシンプルです。基準はそこへ行って楽しいかどうか。で、一番最初に思い浮かべたのが、日本一魚がうまい富山湾。実のところ、魚津についてはほとんど知りませんでしたね、しんきろう以外は。でも、魚津に行けば、うまい魚が食べられるかなあと思つて(笑)。それと、新聞記者時代、新潟県と富山県の違いについて出張取材したことがあるんです。進学率の高さ、図書館の県民一人当たりの蔵書数など、「学ぶ」ことに興味のある県民性だということは知っていましたから、そういう人たちと一緒にいろんなことを考えたりしていくのはおもしろいんじゃないかなと思つたんです。

僕は、故郷・大分でも「自由の森市民大学」の学長を務めています。一番のキーになるのは「自発性」。スタッフはもちろんのこと、さらに大事なことは受講生の自発性です。自分でお金を払い、貴重な時間を使って勉強するわけですから。そういう点では最初、うまくいくのかなと思つてたんですが、皆さん非常に熱心で、いろんなものを次から次に摂取していきこうという気持ちが高い。それが、どんどん高まってきているなと感じています。

仕事柄、人の前で話す機会が多いので、受講生が真面目にきちんと受け止めてらっしゃるのにはよくわかります。ですから、講師の方々も皆さん、非常に真剣に受講生と向き合つてくださつて。それが、とても印象的です。でも今

し話しています。何ができるか、なんて大上段に構える必要はありません。人間というのは、無意識の中で自分の摂取したものが、どこかでにじみ出てくる。頭じゃなく、手足で考えてるんですよ。地域で何かを始めてみたり、地域活動に対する自分の関わり方、発言の仕方など、何らかの形で必ず投影してきます。森のゆめ市民大学での学びは、学校教育的な評価のように、これだけ学んだからこれだけ成果が出ましたというものとはまったく違うんです。

自分はどう生きるか……。そのことを考える学びの場に。

以前、時計会社が実施した世論調査があります。自分たちのライフスタイルに何を求めるか? 「ゆつたりしたい」がトップでした。じゃあ、今の生活を表現する言葉はというと「セカセカ」! おもしろいですね。今、私たちの生活はとても便利になりました。IT化でコミュニケーションも非常にスピードアップしました。流れは明らかに「ゆつたり」に向かっているんだけど、節約できたはずの時間もセカセカしてしまふようなんです。ここ数年でスローライフという言葉も出てきたように、最近では「ゆつたり」の価値を見い出そうとしている人たちが増えてきているように思います。

日本には「緩急自在」という言葉があります。ある時はゆつたり、またある時は急いで……。その判断は「自在」。つまり自分次第なんです。例えば、東京から京都まで、新幹線で約2時間。夜行列車の時代と違って時間が節約された

後は、講師として地元の方にお願する機会もあつて良いんじゃないかと思つてます。別に富山県だけじゃなくてもいい。石川県や新潟県も、割合共通の基盤を持つてるわけですから、そこでの経験から発した言葉の方が、霞ヶ関で頭の中だけで考えてる話よりよっぽど良いに決まつてますよ。富山県は、ユニークな活動をしている地域も人も多いところですからね。その特性を大学の学種にもっと取り込んでいただ方がおもしろいんじゃないかな。

成果は無意識ににじみ出てくる。

市民大学は学びの場ですが、子供の頃から勉強が大好きだった人なんかいません。なのに自分で会費を払い、忙しい時間をやりくりして出てくる。それはなぜか。「学びたい」気持ちがあるからです。自発性ですね。こういうものを見たら楽しいなと感じたり、もっと知りたいなと思つたりすることが大事なんです。

開講日や講義の合間にいつも言っているのは「今日はとっても楽しかった。いい先生の話も聞けた」と言つて帰るだけじゃダメ。大切なのは、それを自分の中でどう活かすか。さらに、講義で得たヒントや刺激をどうやって自分の地域社会に返していくか。これがゴールであつて、大学での講義や出会いは入口にすぎない」ということ。入口は好奇心でいいんだけど、問題はそこ。講義を受信するだけじゃなくて、何かを発信しないとつまらないし、市民大学をやつて目的も達せられないんだ」と、繰り返

ん、京都でセカセカとお寺を駆け巡るか、あるいは京都の空間にゆつたり身を浸すか。その判断は自在在りき。自己決定しなさいと言つてるわけです。「自分はどう生きるか」を考える時も同じ。「自在」という字は、「おのれが在る」と書く。自分はどう在るのかを考えるための道具の一つとして、森のゆめ市民大学があるというふうにも考えてもらえると、いいなあと思つているんですが。

今までは、講師と受講生という形で役割がほぼ固定していましたが、今後の方向性としては、受講生も表現者であつてほしいと考えています。子育て、地域づくり、自然環境、どんなことでもいいんです。興味のあることを核にして分科会を作つたり、地域との関係を深めていったりと、枝葉をどんどん広げていってほしい。そういう意味では、試みていきなさい、というのがあります。自分のような他者が魚津で何かをやる意味というのは、土地の人が気づかないものに気づいてもらいながら、何を伸ばして何を改めるかという議論ができるということ。僕は、そのための触媒みたいな役だと思つています。

●「森のゆめ市民大学」とは……

閉校になった大学跡地を有効利用できないものかと数名の市民が声を上げ立ち上がり、それに賛同する市民の手によって作り上げられた市民大学です。副学長は福岡行政氏と中尾哲雄氏。講師には、立川志の輔氏をはじめ各界の著名人を招いています。